

『童話化』について (三)

本田 和子

三、どのように変化して「童話」となるか。

(その一)

成人の世界に産まれた物語が、子供の世界に入り込んで子供の物語となった時、それはもとのままの形と内容をもった成人の物語ではない。多少はあるにしても、その全てがどこかに変化を受けて「童話化」されている。

この変化はどのようにして生じ、どの方向へなされているか。それを考えてみよう。

「童話化」の二大主流として、「自然的変容」によるものと、「意図的変容」によるものが考えられる。「自然的変容」とは、伝承の過程でいつの間にか変化していき、子供の物語としての体裁を整えていくこと。「意図的変容」とは、変えようとの意図の下に起る変化である。この二つを区別して考えてゆくことにする。

1 「自然的変容」による「童話化」

「自然的変容」による「童話化」は、承け手の受け入れ方によって生じる。即ち聴衆が成人から子供へと移行することによって、伝承される物語が、承け手である子供の心性を反映してくるのである。

一つの物語が記憶される場合には、その記憶者が物語を把握する場合の「意味的枠組」によって、記憶される物語の内容が変わってくる。そして、その「意味的枠組」が成立する過程には、その記憶者の社会的文化的背景が反映し、その人の身につけている態度・習性などが色濃く作用する。それ故に、成人の表現をもった物語も子供に伝えられる場合には、子供らしい表現と内容と、生活描写をもった物語となるのである。

物語が文字として固定されてしまわない口授伝承の場においては、特にこの受容者の心性が作品をリードする。

そして、子供達は、自分達に理解し得ない事柄には基着しない。



理解し得る箇所だけを受け入れ、子供の理解の域をはみ出すものは頓着なしに省いてしまふ。Paul Hazardの言を借りれば、「微笑を以てはじめられたことが憤怒に変わり、嫌悪の中に終ることがあろうとも、子供達はただその微笑だけを覚え込み、それだけを取り入れてしまふのである。」

子供達にとってわかり易く好ましい物語ほど、よく承けつがれ伝えられていったのは当然であつたらう。

例を挙げよう。馬琴の「燕石雜誌」の「桃太郎」の考証によれば、当時「桃太郎」には二型が存在した。即ち、その一つは現在のように「桃から男子の産まれる型」であり、今一つは次のようなものである。

——婆、桃の実を二つ得て家に携えかえりて、夫婦これを食うに、たちまち若やぎて、かくて一夜孕ることありて男子を産めり、因て桃太郎と名づく。——

当時の絵草紙にも後者の型がみられ、婆の産室が描かれている。然し、いつか全く後者の話型は姿を消してしまつた。

——桃がバチンと割れて、中から可愛い男の子が生まれましまつた——。

この件りは「桃太郎」の中でも、特に子供達に愛好される箇所である。このようにして「異常誕生型」だけが子供に承けつがれ、「婆若返り型」は伝承の途次に消えていったのも、子供に与えた印象の強さと、意味のちがひによるものであろう。

口授伝承の場において、児童達は成人によつて、幾分理解し易く子供向きに改められた物語を耳にする。それと同時に、成人達の娯楽のために、職業話術家の語る「夜伽の席の物語」を、成人

にまじつて聞く機会をも持たずに相違ない。そして時としては、同一題材を二通りの型で聞く場合も生じたであろう。そして、子供達の間保存され、子供達のものとした話型と、文化の進展と共に成人の世界から捨てられ、そのまま子供の世界にも住みつき得ぬままに消えていった話型も少くないことと思われる。現在命脈を保っている「昔噺」、即ち「民間説話」の大部分に童話的色彩が濃厚であるのはこの事情によると思われる。

子供達は、好ましくないものを消滅させるだけでなく、それを好ましいよう、理解し得るよう改めることもする。然し、このように、伝承者が子供なるが故に、改められ省かれる部分が好在すると同時に、伝承者が子供なるが故に、成人の場合の伝承の経過を踏襲せず、成人の世界でなら当然改められ省かれる箇所が保存される場合もあるのである。

物語が記憶される場合、主筋に関係の薄い部分や、余計な形容句などは除かれる運命にある。然し、「童話化」の場合においては、これが幾分異つた様相を示している。

次に掲げるのは、この「童話化」の特殊性の例である。今日、「猿蟹合戦」の童話に挿入されて広く流布している蟹の呪文「早く芽を出せ柿の種、早く芽を出せ柿の種、出さぬと缺でちよん切るぞ。」は、今日では極く一部の地方に残っている果樹を脅かして豊年を期待する信仰から出た一種の呪術である。これは、社会の開化と同時に忘れ去られていったものである。この旧い民衆の生活が快いリズムミカルな口調と、木によびかけるアニミズムとによつて、児童の世界に取り入れられ、歴史の波をくぐつて今日まで保存されてきた。筋の展開だけなら、単に「蟹は早く芽が出な

いかと待っていました」程度ですむことであり、この呪文はむしろ不要部分である。然し、伝承者である児童達は、これを省くことをしなかつた。

こうして、児童に独特の省略法と改め方の下に、更に児童に独特の部分が保存されながら、全体としてその物語が簡約化され、単純化されていく時、その物語は童話となる。そして、このように特殊な過程をたどる故に、結果として原型より不合理になる場合が生じる。物語の記憶は「合理化」されるのが通常であるが、「童話化」の場合にはこれが「不合理化」されるのである。

これも例を挙げよう。「カチカチ山」の物語に登場する狸ほど一貫しない性格の持ち主はないと云われる。即ち、婆をだまして殺してしまうほどの性悪な狸が、後段に至っては兎に他愛もなくだまされ続け果ては殺されてしまう。ひどい火傷をさせられながら、また同じ兎に簡単に誘い出されて泥船に乗せられる所など、とうてい以前の狸と同一に思えない。また、火傷の件りでも狸に柴を背負させた後で兎が火をつける場面でも狸は底抜けの間抜け振りを示している。即ち次のようである。

——「カチカチ云うのは何だい。」「ここはカチカチ山さ。」

「ボウボウ云うのは何だい。」「ここはボウボウ山さ。——
これでは問いに対する答えにならない。カチカチ山なる名称をもつからと云って、カチカチ鳴る音の原因は不明であり、ボウボウ山も同様であるのに、狸はいかにもお人好し然と納得している。前後の關係からみてこれはいかにも不合理な話である。

現在のような「カチカチ山」の話型が出来上る前から、兎の大手柄を主にした物語は数多くあったが、その一つに次のようなものがある。

——兎が悪智慧を働かして熊にひどいけがをさせる。次に会った時、熊が兎をひどくなじると、兎は平然として、「ここは杉山だ。俺は杉山の兎だ。葎山の兎のしたことまで俺が知るもんか」と云い逃れる。同様の云い逃れをくり返して、熊をだまし続け、とうとう殺してしまう——。

これは、現在の「カチカチ山」よりも合理的で智巧の加わった話であるが、これが旧型と想像されている。

然し、児童においては、同じ兎が同じ狸をくり返します時の悪役狸の愚かしさを、善玉兎の賢さに興味が集注し、まわりくどいだと思いますための技術が簡単に省略されて圧縮された。そして、カチカチ山なる名称の面白さがそれに附随して残った。婆を殺したほどの悪賢い狸が大した技巧もなく兎にだまされ続け遂には殺されてしまう不合理さも童話の世界なるが故に許されるのである。

理解し得ぬ事柄、陰に潜む伏意、諷刺、文章とか言葉のもつニュアンス、児童の生活から余りにへだたった生活内容などは省かれる。作中の人物は身近なものに、題材は卑俗なものになる。生活には、児童自身の姿が反映され、描写、表現は全てその時代の子供のものとなる。リズムカルな文句、呪術的な要素は残される。そして、結果として平易な単純なものとなり、原型より不合理な点すら現れる。これが、自然に児童の力でなされる変容の姿である。

2 「意図的変容」による「童話化」(その一)

受け手の心性を反映しながら、物語がたどる「童話化」の過程は消極的なものでしかない。より積極的な変化は、伝え手の側の善意に源を発している。

物語の伝え手を大きく分けて、「家庭における伝え手」と「社会における伝え手」の二つの面から考えよう。

物語は、口授伝承の長い歴史を通じて、家庭を場として子供達へ語りつがれてきた。古い時代には、神話・伝説に関しては一定の語り手が役職として存在したが、子供達へ物語を伝えたのはこれらの職業話術家ではなく、子供達と接触する機会のも多い母親か、労働から解放されて時間的に余裕をもった老人達であった。家庭を場にとる時、物語の伝え手が母親であること、そして祖母がこれに次ぐことは今も変らぬ事実であろう。以前に試みた調査でも、約四〇〇名程の男女学生の記憶に残る物語の伝え手は、五五・五%までが母親であり、祖母が続いて一一・四%を占めていた。

それでは、このように母親が物語の主要な伝え手であったということは、物語の「童話化」にどんな影響を与えたであろうか。

職業話術家は話すことをもって生活の糧としている。それ故に聴衆の興味をそそるべく、話し手としての人気を保持すべく様々な工夫をこらし新しい話材も産み出さねばならない。然し、家庭の母親には、この必要はない。子供達に求められた時、それに応じるだけの話材があればそれでよいのである。伝達される話材が、母親自身の幼い時に承けついで昔噺に固定化し、それが代々語りつがれていったのは当然であろう。

伝え手として、母親は先ず話材を固定化した。それでは、これ

等の幾つかの物語を、母親達はどのような意図の下に扱ったであろうか。

もち論、母親達は、子供の求めに応じ、子供の欲求を満たすために物語を与えたであろう。然し、幼い者を教導する立場にあった母親は、この機会をも決して逃しはしなかった。子供達をよりよく育てるために、物語は一つの教材としての役目を持たされたのである。直接に道徳を説くことより、それを物語の中に具象的に描き出すことによって、聴き手に強い感動を与え、聴き手の行動を方向づけ易いことを、母親達は体験として知っていたのである。

例を引こう。先ずボビュラーな昔噺「こぶとりじいさん」をみよう。これは、内容・表現その他の点で旧い記録と現行のものに殆んど差が見られない。然し、「宇治拾遺物語」に採録された説話をみると、勤善懲悪の要素が非常に少い。教訓と云えば次の一文だけである。

——物羨みはすまじきこと——

よい爺と悪い爺、或いは正直爺と不正直爺の対立等は全然みられない。これが善因善果的な現在の物語になったのは伝え手の意図によるものであろう。

次いで、古説話に散在する卑俗なくすぐりや、露骨な表現を女性の細かい神経は児童に伝えることをいとうた。

例を掲げる。これは東北地方に流布していた「猿地蔵の話」である。

——雨宿りをしている中に眠ってしまった爺を猿が見つけてお地蔵様だと思ひ、かついでいって多くの供物をする。爺は夜が

明けてからその供物を持ってかえる。隣の爺が真似をするが、猿がかついで河を渡る時にはやす滑稽なはやし言葉に、遂笑い出してしまふ。偽者と気づいた猿達は、爺を河の中に投げ込む。

この物語は、猿のはやし文句が中心になっていて、それを笑わずに我慢した爺と耐えきれずに笑い出した爺とを対照させている。このはやし文句は所により様々であるが、「猿ふぐり濡らすとも、地藏のふぐり濡らすな」といった調子の下品なくすぐりで笑いを狙ったものであった。それ故に、現在も「猿ふぐりの話」という名前でよんでいる地方もある位である。然し、女性の注意深い神経は、この卑猥な笑いを好まず、はやし文句は「猿は濡れても地藏さん濡らすな」式に変えられていった。これでは、物語のおかしみは消失し、隣の爺が笑い出して失敗したのがむしろ不思議である。「童話化」され、注意深い改変がなされて、この物語も不合理になっていった。

母親達は亦、美しい話を愛し、女性特有の感覚で、残酷な事件・陰惨な出来事を嫌悪した。

例を挙げよう。「カチカチ山の童話は誰の目にも著しいつなぎ目をもっている。即ち、爺の手に容易に捕えられる狸が、急に悪賢い偽善者となって婆をだまし、更に子供のように兎の云うなりになって殺されてしまふというように一貫しない性格を示すが、これは異った物語が繋ぎ合わされている。ことにもよっている。「牛方山姥」とか「天道様、金糸綱」とかの昔噺もこの型であるが、こういった結合について柳田国男氏は次のように述べている。即ち、これらは全然独立した物語として、以来から存在した。「カ

チカチ山」の第二段は所謂動物説話で、狸の持ち前の悪智愚で厄難を脱するのが話の山である。然し、この物語の結末、婆を殺してそれを料理し、それを爺に食べさせる件りは、グリム説話にも、わが国の「瓜子姫子」等にもみられる型であるが、子供達に与えたくない陰惨な部分である。そこで幼い聴衆の意向を慰め、おぞましい後味に震えさせぬために、女性の感覚が渡り廊下式のものを開明した。即ち、兎が現れて爺の悲嘆を慰め仇討ちを誓うという繋ぎ目である。後段の兎の大成功を述べた物語は、この結合以前から数多く存在し、兎のいじめる対象が熊であったり鹿であったりして、狸汁とは関係のない物語であったことは前にも触れた通りである。

同様の例がギリシヤ古伝説の「童話化」にもみられる。即ち、伝説では死を免れ得なかつたサムソンを「デダロス」の翼によって逃れさせているのである。

伝承の過程で、古い物語はこうして母親の主管の下に教訓を附され、下品な箇所・残酷な部分が省かれながら「童話」と化していった。そして、この力は華々しく表面にこそ現れないが、現在においても絶えず働き続けて、成人の世界の物語を童話の方向へと押し進めているのである。物語を求められ、既成の童話が話しつくされた時、母親達のかつて読み、或いは聴いた物語が「童話化」されて、子供達の世界に入り込んでいくのである。

(未完)